

1

1 暑  
い  
2 軽  
く  
3 美

4 温和  
5 配合  
6 自負

2

1 A 変わる  
B 変わらない

2 転校  
3 ① イ  
② ア  
⑤ ウ  
4 ウ

5 たった  
(5 完答)  
しまう

6 I 優希がいなくなる

6 II 優希がそばにいる  
7 エ

3

1 ① イ  
③ エ  
④ ア  
2 当然  
(2 完答)  
よい

3 感謝  
4 I i いただく  
ii 食材を

4 II あちこち走

5 エ  
6 食べる  
7 イ

配点	
1	各2点×6=12点
2・3	各4点×22=88点
〈計〉100点	

1 「熱」と書かないようにしよう。「暑い」は気温の場合に使い、反対語は「寒い」となる。一方、「熱い」は気温以外の場合に使い、反対語は「冷たい」となる。

2 右上の「又」を「各」の上の部分のように書いてはいけない。右下は「エ」ではなく「土」である。

3 正しい筆順で書く。二つの点↓上のよこ棒↓たて棒↓二本目・三本目のよこ棒↓「大」である。

4 「温和」とはこの場合、「性質がおだやかで、やさしいこと」という意味である。「穏和」とも書く。

5 「配」の左側は「西」ではなく「酉」である。右側は一画で書いてはいけない。三画である。

6 「自負」とは、「自分の才能や仕事に自信やほこりを持つこと」という意味である。

2 **A**・**B** がふくまれていて一文の直後の二行から、「わたし」が、家族と優希がそばにいることだけはぜったいに変わらないと思っ**B**ていることがわかる。よって、**B**には「変わらない」がはいる。また、「ちよつとくらしい街が変わっても」という例から、**A**には「変わる」がはいると考えられる。

2 **C**の次の行から「優希が**C**するときいたとき」の場面について書かれている。**C**の四〜五行後に「お父さんがイギリスに転勤になる」「九月からロンドンの日本人学校に通う」とあるが、学生の優希には「転勤」はあてはまらない。「わたしとちがう学校に通う」ということをあらわす二字のことばをさがそう。

3 ① ② ③ ④ ⑤ がふくまれていてる部分は「わたし」と優希が会話している場面なので、ウはどこにでもはいりそうである。よって、ウは後回しにするべきである。イの「首をふ」とは、相手に不賛成・不満の気持ちをあらわすしぐさである。この場面では優希は「わたし」に対して不満の気持ちを持っていないので、不賛成、つまり相手の言っていることを否定していると考えられる。(①)の直前の「うっそだーっ」という「わたし」の発言に対して、優希は「ごめんね」といっている。ここでの「ごめんね」には「うそではない」という意味がこめられているので、(①)にはイがはいる。アの「わたしの顔を見ない」のは、「わたし」に対して何か気まずいことがあるからである。(②)がふくまれている一文の、「ほんとうはずっと前から決まっていたものなかなかないだせなかつた」という部分から、「わたし」からはなれることだけでなく、伝えるのがおそくなったことも気まずく感じていることが読み取れる。よって、(②)には、アがはいる。

4 (中略)の次の行の「優希とわかれたあと、どうやって家に帰ったのかはつきりしない」という部分から、この「ぼんやり」がしばらくつづいてい**る**ことがわかる。その後の場面で、優希がいなくなること**で**頭がいっぱいになってい**る**ところからわかるだろう。

5 ◎の文の「そんな」が「わたし」の発言の「優希だけこっちに残る」をさしている**と**わかれば易しいだろう。——線④の二行後の「もし、優希だけが日本に残るとしたら」と同意なので、このあとの部分が答えとなる。

6 I 「空想」とは、「現実にはあり得るはずのないことをいろいろと思**い**めぐらすこと」であり、ここではちいさいころに**考**えていたことである。

II 「バリアに守られていた」とは、「わたし」がマイナスの状態になら**な**かったということであり、ここでのマイナスとは「優希がいなくなる」という空想である。つまり、バリアのおかげで「優希はいなくな**ら**ない」と思**え**ていたのである。

7 「バリア」が「やぶれた」ということは「守れなくな**つ**た」、つまり「優希がいなくな**る**」ことになってしまったのである。

3 **A** (①)の前では、当たり前だと思**っ**ている私について、(①)の後では、当たり前**の**ことに反対する親について述べられているので、逆接のはたらきの「しかし」がはいる。(③)の後では、動植物の「命をいただく」ことについての例が述べられているので、例示のはたらきの「たとえば」がはいる。(④)の後では、「いただきます」が必須であると述べられており、そう考える理由を(④)の前で述べているので、原因と結果をつなぐはたらきの「だから」がはいる。

2 (中略)の前の「我が子は『いただきます』だの『ごちそうさま』だの言わなくてもよい」をさしていることはわかるだろう。ただ、この部分だけでは不十分である。いつでも言う必要がない、と言**っ**ているのではなく、給食費を支払**っ**ているのだから食べられて当然である、というふう**に**言**っ**ているのである。

3 **A**がふくまれていて一文が、**A**の三〜四行後にある「そのこと(命をいただくこと)に対する深い感謝を述べるのが『いただきます』なのです」という部分と同意である。

4 I 「どういうことに対して」という表現から、「ここまで何について述べられているか」を聞かれてい**る**とわかる。ここまでは「いただきます」について述べられていた。また、「いただきます」とはどういう言葉か、ということについて**A**がふくまれている一文で述べられてい**る**と気づけば、(ii)もさがしやす**い**だろう。

II 線⑤の文から「ごちそうさま」という言葉について説明されているので、ここよりあとの部分からさがす。——線⑤の七行後の「『ごちそうさま』は……」という一文が——線⑤と同意になっているので、ここが答えとなる。

5 「いただきます」や「ごちそうさま」を「子どもに言**わ**せない」親に対して、筆者は「バカ**げ**ている」と述べていることから、マイナスの気持ちであるとわかるだろう。また、「なぜ言**わ**せないんだら**う**？」というただの「疑問」ではなく、このような現状に対して、「おかしい」と思**っ**ているのである。

6 **B**の次の二行から、「食**べ**ること命をつなぐこと」だとわかる。「命をつなぐこと」とはもちろん、「生きること」である。**C**がふくまれていて一文をわ**か**りやすくい**か**えると、「多くの食材の命をもら**い**、食材を多くの人たちが運んだり調理したりしてくれるおかげで自分**が**生きてい**ら**れる」ということに対して、**C**「ことだ**ど**う認識を持つべきだ」となる。

よって、**C**にはプラスの表現がは**い**るとわかる。「ほほえましい」は「思**わ**ずにこ**り**と笑**っ**てしま**い**たく**な**るさま」という意味なので、この文脈には合**わ**ない。